

2024年7月

CWS JAPAN NEWSLETTER NO.94

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

ゆっくりとコミュニケーションができる 出張カフェを初開催 令和6年能登半島地震 災害支援

こんにちは！CWS Japanプロジェクト・オフィサーの五十嵐望美です✿

7月になり、東京は梅雨と夏の気だるいムシムシした熱気と暑さに包まれ、体力が奪われやすい季節になってきました☔☀️皆さま、くれぐれも体調には気をつけて、過ごしていきましょう…！！

そして、今月をもって、2024年元旦に能登半島沖を震源に発生した地震から半年という月日が流れました。

CWS JapanはAct Allianceの加盟団体として、これまで国内各地で発生した災害に見舞われた被災地での支援活動を行ってきました。そして、今回の能登半島地震においても、地震発生後の3月から毎月1回、石川県輪島市にて炊き出し(今回は出張カフェとして！)の支援活動を行ってきました。

先日は私も初めて一緒に参加させていただき、能登を訪れましたので、今回はそのレポートをお届けしたいと思います！

まだまだ地震の爪痕が残る能登へ

6月某日、2024年3月に延伸開通したばかりの北陸新幹線かがやきに乗って福井県へと移動し、そこから石川県の能登半島方面へと車で向かいました🚗

地震発生から半年ほど経つ今も、能登に向かう高速道路は至る所で補修工事が行われており、行きの道路はかろうじて片側だけ通れるようになっていました。大きな地割れが残っている箇所も多くあり、当時の地震による甚大な影響や爪痕を感じる光景が続きました。



能登に向かう高速道路の片側車線は補修工事を行っている箇所が続いていました。©CWS Japan

そして、活動場所である輪島市に入ると、倒壊した建物やブルーシートで覆われた家屋があちらこちらで見えました。今も信号機や電柱が大きく傾いたままかろうじて作動しているような光景の中、閑散とした街の様子があがええました。



石川県輪島市にて 撮影:李海勲(バプテスト京都教会)



輪島市中心街にて ©CWS Japan

ゆっくりとコミュニケーションが できる出張カフェを初開催

そして、これまで炊き出しを行ってきた会場である輪島市ふれあい健康センターにて、今回は初めて「カフェ」という形式で被災者の方に飲み物やお菓子・軽食を提供しました。



会場の輪島市ふれあい健康センター。
今も避難所として機能していて、訪問時点では約30の方がここで避難生活を送っておられました。
撮影:李海勲(バプテスト京都教会)

当日はかなりの強風に見舞われ、カフェのセッティングにも一苦労しました😓💧しかし、ふれあい健康センターでは被災者の方に向けてシャワーの貸し出しなども行っていて日ごろから立ち寄っている方もおられたので、私たちが設営を準備している間にも、通りすがりにいつ開催するのかを尋ねてくださる方もいらっしゃいました。

そして、オープンの時間になると、たくさんの方が見えて、福井県から車に積んで大量に用意してきたおはぎやクッキーなどのお菓子類は、最初の数時間ですぐなくなるほどの大人気でした。



撮影:李海勲(バプテスト京都教会)



撮影：李海勲(バプテスト京都教会)



「ぬくもりカフェ」と題して、平日の午後の時間帯にカフェを設営して開きました。

撮影：李海勲(バプテスト京都教会)

これまでの炊き出しでは食事をもらい次第帰られる方がほとんどで、来てくださった方と交流することもままならなかったのですが、今回はカフェという形でイートインスペースも用意したことで、来てくださった方が椅子に座って軽食をとりながら、支援スタッフやボランティアともゆっくりお話する機会を作ることができました。

そこで、ご自身の被災の状況や避難生活についてお話しして下さる方や「久々においしいコーヒーやお菓子を食べられてホッと一息つくことができた」とお話しして帰られる方も多く、私自身もカフェという形で開催する意義を感じた時間でした。



カフェを開いている間は断続的に立ち寄る方がおられて、談笑したり軽食をとったりしている姿が見られました。

撮影：李海勲(バプテスト京都教会)

今後の活動について

現在、能登の被災地ではこれまで生活していた避難所から仮設住宅に順次移動して避難生活を続けられる方が多くいらっしゃいます。そこで、今後は仮設住宅の集会所を訪問して、同様の出張カフェを行っていく予定です。

被災地の復旧・復興までの道のりにはまだ多くの時間や労力を要する現状ですが、CWS Japanとしては引き続き被災された方のニーズに合わせた支援活動を行っていきます。また定期的にレポートもお届けできたらと思います！

(文：プロジェクト・オフィサー
五十嵐望美)



皆さまのご理解・ご支援を
心よりお願い申し上げます。

継続的な
寄付

今回のみ
寄付

ケニアでの豪雨による洪水被害について（続報）

アフリカ・ケニアで、2024年3月から6月に降った豪雨によって起こった洪水被害への対応について、続報をお届けします。

ケニアでの豪雨による洪水被害について

ケニア政府の災害対応機関であるNational Disaster Operation Centre(NDOC)によると、2024年3月から6月までの間に豪雨によってもたらされた洪水により315名が命を落とし29万人以上が避難を余儀なくされました。

■豪雨による洪水被害が続くケニアにて支援を行います！

CWSのケニア事務所が支援活動続けるタナ・リバー郡は、ケニア最長河川であるタナ川の下流域にあたり、急な増水により河川が氾濫したため、大きな被害が発生し最も深刻な影響を受けた地域の一つとなりました。同郡内には今もなお19カ所の避難所があり、2,365世帯以上が避難生活を続けています。避難生活を続ける人や、自宅に戻った人びとの生活環境は依然厳しく、特に食料の確保が最優先の課題として挙げられています。

そのほかにも生活必需品の確保、保健医療、衛生環境、感染症対策、道路や河岸、農業設備の復旧や改修、教育や防犯などの多くの分野での支援が横断的に必要となっています。加えて、水害によってトラウマを抱えた人に対する心理的サポートの支援も必要とされています。

CWSケニア事務所による緊急支援を実施
こうした状況を受けて、CWSのケニア事務所はこれまでタナ・リバー郡の被災した610世帯に対して、1ヶ月分相当の主食（トウモロコシ粉や食用油、塩など）および、農業の復旧のための種子を提供しました。

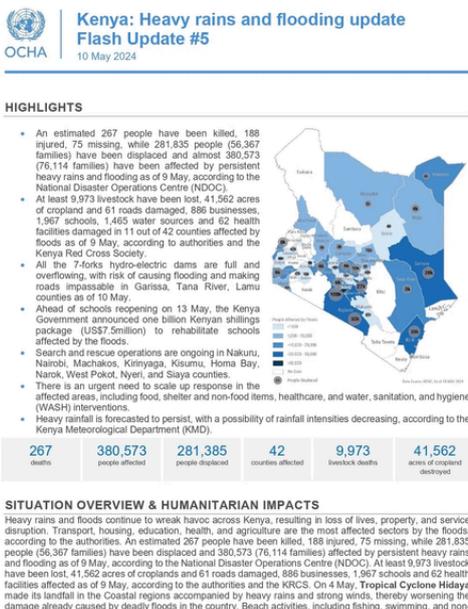
発災当初からCWS JapanもCWSケニアの活動を側面支援しています。



タナ・リバー郡で配布する食料を準備する住民やCWSケニアの職員 ©CWSケニア



©CWSケニア



今後に向けて

タナ・リバー郡では干ばつと豪雨が周期的に繰り返し発生し、災害に対して脆弱な地域でもあります。中長期的な復興に向けた、現金給付を含む多様なニーズへの対応に加え、地域住民、ケニア政府やほかの支援機関などと連携した防災への取り組みの必要性が非常に高くなっています。

CWS Japanとしても、日本やアジア各国で実施した防災事業の知見や経験を活かし、CWSケニア事務所と連携した取り組みができないか模索しています。具体的には、今回の被災シナリオを精査した上で、当該地域が今後同じような被災をしないためには何かできるのか、さまざまな防災・減災施策を検討していきます。

気候変動の影響によって、降雨シナリオが大きく変わり、干ばつや豪雨災害を繰り返すこの地域において、護岸や水路など地域レベルで対応可能なインフラ整備や、平時における水資源の有効活用や水害時の対応計画の整備・見直しなどの選択肢の中から、地域が主体的に実行でき、維持管理できる手段や手法を選択して実践することが重要だと考えます。

アフリカでは伝統的に洪水灌漑(かんがい)を進めてきている地域もあり、現地の伝統的な知見も活かしながら日本の専門家も交え、検討を進めてまいります。

(文：プログラム・マネージャー
五十嵐豪)

●●
【事業進捗報告】
ケニア
豪雨による洪水被害について (続報)

たった一人のためにでも、世界をつなげたい。
CWS JAPAN
Church World Service



さまざまなSNSで 情報をお届けしています

CWS Japanでは各種SNSで、日ごろから情報をお届けしています。お好きな方法で最新情報をぜひチェックしてみてください



各種SNSは
ここをクリックor
QRコード読み込み



防災グローバル フォーラム (UR24) に出席してきました

こんにちは、事務局長の小美野です。6月17日から20日まで、姫路で開催された防災グローバルフォーラム (Understanding Risk Global Forum) に出席してきました。



UR24ホームページから

このフォーラムは、災害へのレジリエンスをめぐる実践者や研究者の世界的なコミュニティで、世界銀行が2年ごとに開催しています。今回は1,000人以上が国内外から出席しました。私は2つのセッションに登壇させていただきましたので、その報告と、そのほかのハイライトもお伝えします！

安全な都市計画に向けて

まず最初に登壇したセッションは「Acting Today to Reduce Risk Tomorrow: innovative tools to reveal risk and co-create future cities」(明日のリスクを減らすために：リスクを明らかにし、未来の都市を共同創造する革新的なツール) というセッションで、ADRRNでも協働しているネパールのNSETや学术界の方々と共に、「安全な都市計画」に向けた議論を行いました。



防災グローバルフォーラム (UR24)
に出席してきました



日本の昨今の教訓をもとに、このセッションでは以下の3点を強調させていただきました。

1. 災害リスクに関する科学的な情報が自治体の都市計画と直接結びついていないことも多いので、より安全な都市づくりという大きなビジョンを提示した上で、さまざまな部局が協働する体制が重要。

2. 都市では人口動態が常に変化しているので、伝統的にそこで暮らしているコミュニティと新しく入ってきた人々は、その地域で過去に起きた災害に関する経験的な情報を共有しておらず、教訓が平等に伝わらない。

3. 日本でも、特別養護老人ホームの約3割が洪水浸水地域にあるので、地域福祉と防災は一体のものとして考え、地域レベルの災害リスクのガバナンス (例えば町内会などの取り組み) を、より公的な災害リスクのガバナンス (市や県などの取り組み) につなげることが重要。

日本はどのようにして予防行動と 早期警報に貢献できるか？

また、CWS Japanが共同事務局を務めている防災・減災日本CSOネットワーク (JCC-DRR) として「How Can Japan Contribute to Anticipatory Action and Early Warning for All? Introducing Cross-Sector Initiatives」(すべての人のための早期警報や早期警戒アクションに日本はどう貢献できるか？セクターを超えたイニシアティブの紹介) というセッションも実施しました。

このセッションではJCC-DRRとして掲げている早期警戒システムに関する提言を紹介し、環境省が主導する早期警戒システムの官民プラットフォームからの事例紹介、神戸看護大学の神原先生からは地域の保健システムを内包した早期警戒や早期アクションのあり方などの示唆をいただきました。

私からは「危険な時」に「危険な場所」にいないようにするための早期警戒アクションのあり方や、一人ひとりの早期アクションに向けた意識や意思決定の重要性を強調しました。



JCC-DRRのセッション登壇中 © JCC-DRR

フォーラム全体を通して

このフォーラム全体を通してハイライトしたい点も以下3点共有いたします。

・仙台市と東北大学による、仙台市の仙台防災枠組実施状況の中間評価に関するプレゼンテーションがありました。国だけではなく、市独自の取り組みとしてこのような中間評価を行うのは世界的に見ても非常に珍しく、日本が誇れる事例だと感じました。

・自然に根ざした社会課題の解決策（NBS：Nature Based Solutions）が大きな焦点を当てられています。世界銀行も、NBS opportunity scanと呼ばれる、都市計画におけるNBSの潜在的な利益（例えば緑化を進めると何度温度が下がることが期待されるなど）を可視化するツールを積極的に紹介していました。このツールの背景にある考え方は、我々NGOがコミュニティと行う活動のインパクト評価にも活用できると思っています。

・都市部のヒートアイランド対策、河川の堤防の保護、地滑りのリスクの軽減など、NBSを利用したさまざまな事例紹介もありました。これらを広めていくことで、環境に優しく減災効果のある取り組みが実現できるのではと感じます。

このようなフォーラムは、仲間づくりやパートナーシップ強化において重要だと考えています。さまざまな事例から学び、協働の可能性を考え、今後の取り組みに活かしていきたいと思います。



日本の伝統工法のソダを活用した河岸浸食対策の事例（国際建設技術協会のブースにて © CWS Japan）

特定非営利活動法人CWS Japan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)